

終電を逃して深夜バスに乗ったら、隣の男にクリトリスだけで何度もイカされ、終点の公園トイレで奥まで犯された夜

終電を逃した。

残業の計算が甘かった。駅の時刻表を見上げて、私は小さくため息をつく。改札の向こうでシャッターが下りていく音が、やけに大きく響いた。

タクシーで帰るには家は遠すぎるし、財布の中身も心許ない。スマホで検索して、ようやく一つだけ手段が残っていることを知った。

深夜バス。

この街を大きく回り、私の住むあたりが終点になる路線。始発近くまで動いている、終電を逃した人のための最後の足だ。バス停に着いたときには、時刻はとうに日付をまたいでいた。

（やっと来た……！）

やってきたのは、四列シートのくたびれた車体だ

った。夜行バスみたいに立派じゃない。街の路線バスに毛が生えたような、でも座席だけは倒れる、中途半端な深夜バス。乗り込むと、車内は思ったより空いていた。前方に数人、うつむいて眠っている影があるだけだ。

私は一番後ろの通路側の席を選んだ。バッグを膝に載せ、脱いで畳んだコートをその上から重ねる。ようやく息をつけた。

（目的地まで時間あるし、ちょっと寝ちゃおうかな……）

バスが動き出す。窓の外を、ぼんやりとした街灯の光が流れていく。乗客たちはみんな眠っているのか、車内に音はほとんどない。エンジンの低い唸りと、時折ブレーキが軋む音だけが響いている。

——次の停留所で、男が乗ってきた。

背が高く、二十代後半に見える男だった。切れ長の目が印象的で、高い鼻と薄い唇が整った顔を作っている。どこか無造作な色気があった。

きちんとした暗い色のコートを羽織り、片手に薄い鞆を提げている。コートの下の白いシャツ、その首元からのぞく首筋が少し日焼けしていた。手が大きくて、指が長くて骨ばっている。

（かっこいい人……）

男は空いている前方の席をいくつも素通りして、まっすぐ後ろへ歩いてきた。そして、よりにもよって私の隣——窓際の席に、断りもなく腰を下ろした。

（え、隣……？）

「……」

前の方はいくらでも空いているのに。そう思ったけれど、気が弱い私には言い出せない。窓際が好きな人なのかもしれない。後ろの方が落ち着く人なのかもしれない。そう自分に言い聞かせて、バッグを抱える腕に少しだけ力を込めた。

男は座ると、こちらをちらりと見た。目が合う。

口の端がほんの少し上がった気がしたけれど、暗がりのせいかもしれない。

「こんな時間まで、お仕事？」

落ち着いた低い声だった。車内にずっと溶ける、耳に心地よい声。

「いつも乗るの？」

「……………終電、逃しちゃって」

「奇遇だな。俺も同じ」

そう言って、男は前を向いた。会話はそれきりだった。

ほっとして窓の外に目をやる。でも、隣に人がいるというだけで、さっきまでの安心感は少し薄れていた。肩が触れそうな距離。コート越しに、男の体温がうっすらと伝わってくる。

しばらくして、車内の照明が半分ほど落とされた。天井の明かりが弱まり、通路の足元灯だけが残る。

薄暗いけれど真っ暗ではない、中途半端な明るさだった。

（あ、夜だから電気落としてくれるんだ……）

前方の乗客たちの後頭部が、影絵みたいに並んでいる。みんな眠っていて、こちらを見ている人は誰もいない。三列前の男性はこくりこくりと船を漕いでいる。窓に頭を預けた女性はもう完全に寝入っているようだった。

私も目を閉じようとした。終点まで、まだ一時間以上ある。少しでも眠っておきたかった。

膝に重ねたコートの、その下。畳んだ布の陰で。

男の手が、そっと私の太もものに触れたのは——そのときだった。

「！？」

最初、それが何かわからなかった。

コートの下、スカートに包まれた太ももの上に、